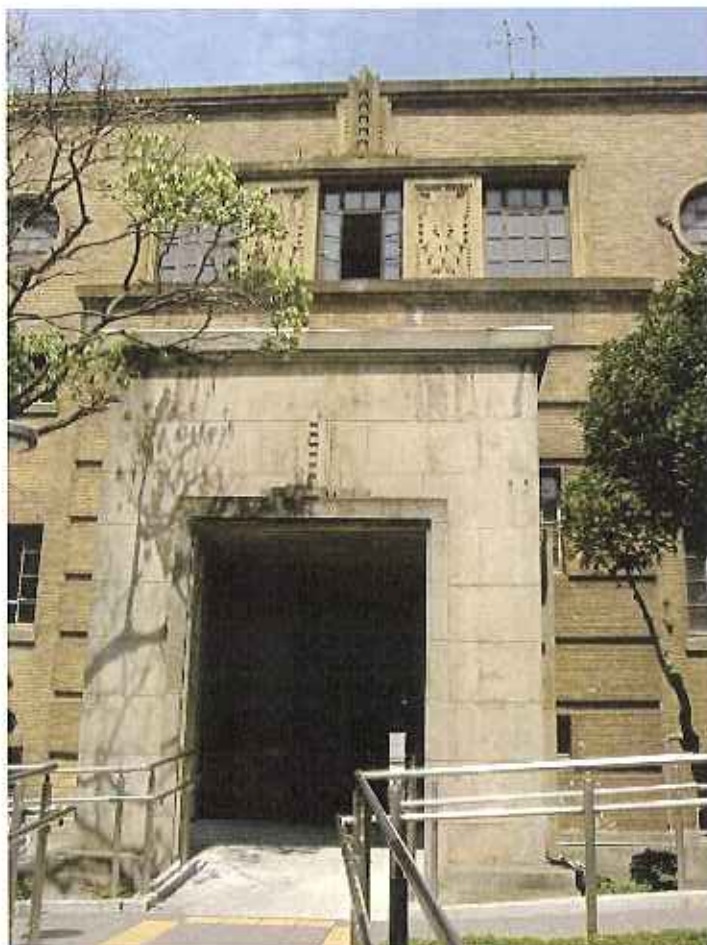


社会教育会館の保存と活用について



平成 19 年 1 月

大津まちなか元気回復委員会

1 はじめに

JR大津駅から浜大津にかけては、湖国を訪れる人にとって、いわば大津の顔とも言うべき地域です。

「まちなか」とは、商業集積が高い地域を意味するものではありません。

「まちなか」を意味する中心市街地とは、長い歴史の集積と緑の山並みや琵琶湖の広がりにも恵まれた景観、そこに住みつづける人がいて、働き、買物も観光もできる地域です。

そしてなにより大津の誇るべきもの、大津にしかないものが今も存在するところです。

それは「大津の顔」と呼ばれる地域であります。

大津市は、平成15年10月、全国で10番目の古都に指定されました。それにふさわしい「大津の顔」をこれからも住み続けることのできるまち、結婚し、子を育て、老いを迎えるまち、働く場があるまち、買物や観光に訪れることのできるまち、大津の歴史と文化がのこされているまちとして、あらためて大切にしていかなければならないと考えます。

そのためには、もう一度大津の「まちなか」の魅力を見つめなおし、作り上げてきた資産をもっと有効に活用し、便利に、気持ち良く、助け合いながら暮らすまちを築き、にぎわいのある界隈の再生をめざして、「まちなか」に集まることを呼びかけましょう。

そして、大津市の元気の素を「まちなか」から立ち上げましょう。

こうして私たちは、大津市の中心市街地活性化を行政とのパートナーシップにもとづきながら市民の自らの手で実現するため、大津まちなか元気回復委員会を平成15年12月に設立しました。

大津まちなか元気回復委員会では、これまで商店街の問題として見られがちであった「まちの活性化」を住民の問題と捉え、長等、中央、逢坂学区の自治連合会が中心になって、住民の視点から活性化に取り組んでいます。

これまで、まち歩きやマップづくり、まちなかコンサートの開催などの活動を行う一方で、古都大津の玄関口である大津百町に位置する社会教育会館を今後のまちづくりに活かさないか、その保存と活用について検討を進めてまいりました。

この報告は、委員会での議論や市民の皆さまとの意見交換の内容をまとめさせていただいたものですが、中心市街地の歴史資産、資源である社会教育会館を保存し、活用することにより、市民がいつまでも住みつづけたい、訪れる人が是非また訪れたいと実感できるまちを築き、しいては、この大津のまちなかの活性化につなげることができる、私たちはそう固く信じて活動しています。

大津まちなか元気回復委員会

委員長 酒井英夫

2 社会教育会館（浜大津市民ホール）のみつめてきたもの〈館の歴史〉

社会教育会館は、昭和9年（西暦1934年）5月に、大津商工会議所と大津市立図書館とを併設した大津公会堂として総工費8万4千円で現在の地に建設されました。ここは当時「橋本町」または「大橋堀」とよばれ市役所がそばにありました。



この時期の建物としては大津市内でも数少ないもののひとつで、昭和22年（同1947年）1月には大津商工会議所が移転し、内部改装の後、5月3日、日本でも最も早い時期の公民館、大津公民館として開館し、その後の大津市における社会教育活動の拠点として利用されてきました。

戦後の大津の若者たちは、公民館を拠点として活発な文化活動を展開し、なかでも演劇では、人間座、文芸座などが活躍し、そこには若き日の花登筐らの姿もあり



ました。その他、大津音楽同好会、大津美術クラブ、大津読書会、大津華道研究会、大津書道研究会などが活発に活動しています。昭和23年（同1948年）5月、日本で唯一の財団法人の公民館に組織替えし、昭和24年（同1949年）6月の社会教育法発布により、昭和25年（同1950年）5月、再び市立公民館となっています。

昭和42年（同1967年）、瀬田、堅田に公民館を設置するとともに大津公民館は中央公民館と改称。昭和50年（同1975年）4月からは大津市民会館に移転することとなり、以後、昭和60年（同1985年）4月まで中央学区の市民センターや

大津市急病診療所として地域活動、医療活動の場
に使用されてきました。そして昭和60年8月17
日、再び大津市社会教育会館の名で21世紀にはば
たくふるさと都市大津の社会教育の拠点として復
活しています。



3 保存と活用についての検討経過

平成15年 9月 1日

長等、中央、逢坂の3学区自治連合会連名で、社会教育会館の施設整備等についての要望書を大津市長あてに提出する。

平成15年12月19日

社会教育会館という歴史的資源の保存、利活用を中心市街地全体の問題として捉え、住民の視点から活性化について検討するため大津まちなか元気回復委員会を発足。以後、まち歩きやマップづくり、まちなかコンサートの開催などの活動を開始する。

平成18年 4月 1日

大津まちなか元気回復委員会の下部組織として社会教育会館利活用検討部会を設置、具体的な利活用方策の検討を開始する。

平成18年 6月13日 [第1回検討部会開催]

利活用にかかる基本的な考え方の整理を行う。

平成18年 6月22日 [第2回検討部会開催]

利活用の方針について検討を行う。

平成18年 7月 7日 [第3回検討部会開催]

耐震診断調査の経過報告を聞くとともに機能の整理を行う。

平成18年 7月27日 [第4回検討部会開催]

利活用計画の検討、市民啓発の方法等について検討を行う。

平成18年 7月31日

大津まちなか元気回復委員会臨時総会を開催し、検討部会における検討内容の経過報告を行う。

平成18年 8月28日 [第5回検討部会開催]

外部委員を招聘し、検討部会の案をもとに意見交換を行う。

平成18年 9月15日 [第6回検討部会開催]

外部委員との2回目の意見交換会を開催する。

平成18年10月

社会教育会館の今後について広く市民の意見を聴くため、大津市ホームページ上において保存、利活用にかかる意見を募集する。

平成18年10月12日

社会教育会館の今後について広く市民の意見を聴くため、『旧大津公会堂〔社会教育会館〕の保存と活用を考える市民フォーラム』を開催する。

平成18年11月17日 [第7回検討部会開催]

市民フォーラムで出された意見の整理等を行う。

平成18年11月20日

第2回目の市民フォーラムとして『社会教育会館のあり方について話し合う会』を開催する。

平成19年 1月11日 [第8回利活用検討部会開催]

平成18年度における活動内容を報告書として整理する。

4 保存と活用の目的

(1) 「まちなか」の顔づくり

大津市の中心市街地は、江戸時代には「大津百町」と呼ばれ、旧東海道沿いの宿場町、港町として非常に栄えたまちでした。幸いにも当時の佇まいを偲ぶことができる歴史的な建物が数多く残っています。

中でも、社会教育会館は、昭和9年（西暦1934年）5月に大津商工会議所と大津市立図書館を併設した大津公会堂として建設されたもので、まちなかに唯一残っている大津市所有の近代建築物です。

戦後、日本でも最も早い時期の公民館となるなど、地域住民にとって身近な施設として、また「昭和」ロマン漂う風格ある建物として多くの市民に親しまれてまいりました。

昭和30年代に滋賀県下最大の商業集積と観光客を数えた中心市街地は、モータリゼーションの進展等にあわせて次第に活力が低下、人口の減少や商店街の空き店舗の増加など衰退する一方ですが、中心市街地の歴史資産、資源（ストック）ともいえる社会教育会館の保存、活用を図り、その元気がまちの中にも広がる、また、まちを育てる拠点とすることで、中心市街地にいつまでも住み続けたい、あるいは訪れてみたい、働きたいまちとしてまちなかを再生する、それが都市再生の鍵となります。

湖都大津を代表する文化活動の拠点施設である社会教育会館の偉大な使命を後世に伝え、限りない発展を願うとともに、「公会堂」という本来の性格を思い起こし、市民が自由に出入りして語り合う場として活用することが、この大津のまちなかの「顔」となり、まちづくりに、活性化につながるものと考えます。

● 中心市街地活性化の基本戦略

- ・ 古都大津を表現し、発信する中心地の形成
- ・ 大津らしい個性あるまちなみ・景観の形成
- ・ 高齢者が住み続けられ、若者をよびこむ多世代居住
- ・ 都心部に新しい産業活動の場と機会の創造
- ・ 情報と交流の空間と仕組みづくり
- ・ 日常生活および災害時にも安心・安全な都市環境整備

(2) 社会教育会館の意匠～優れたデザイン～

社会教育会館は、そのデザインにも目を見張るものがあります。

建築的にはシンプルな構成ですが、東西に長い長方形平面をなし、両端に階段室を設けるとともに、東西両面に車寄せを突き出しています。

1階と2階は中廊下を通して両側に諸室を並べていますが、2階の西端だけは南北方向の梁間いっぱいに使っています。3階は大ホールで西端にステージを置き、この大ホールの梁形を見せた室内意匠は高い評価を受けています。

外観意匠は、スクラッチタイルを貼り、水平線を強調した手法で、近代建築の四大巨匠のひとりとも呼ばれるフランク・ロイド・ライトの影響を受けた、いわゆる「ライト式」建築です。そこに様式的なアーチ窓やアールデコ風の直線的装飾がちりばめられた巧みな折衷デザインは1930年代の建築意匠の一典型ともいわれています。



また、平成10年から平成11年にかけて滋賀県教育委員会が行った滋賀県近代化遺産（建造物等）総合調査（全271件）において、大津市内に現存する建築物の中でも意義あるものとしてランク付けされており、歴史的にも価値の高い建物との評価も受けています。



※スクラッチタイル

ささくれだった多数の溝が表面に刻まれているのが特徴。ワラビと呼ばれる土のささくれの大小やワラビの押さえ込みの有無等により表情が変わる。

※フランク・ロイド・ライト（Frank Lloyd Wright、1867年6月8日 - 1959年4月9日）

アメリカの代表的建築家。アメリカ大陸と日本に作品を残している。近代建築の四大巨匠の1人とも呼ばれる。住宅建築を得意とし、プレイリースタイル（草原様式 Prairie Style）の作品で知られるようになった。基本的にはモダニズムの流れをくみ、幾何学的な装飾と流れるような空間構成が特徴である。

※アールデコ（仏：Art Déco）

一般にアール・ヌーヴォーの時代につき、ヨーロッパおよびアメリカ（ニューヨーク）を中心に1920年代から1930年代にかけて発展したデザインのこと。

※アール・ヌーヴォー（仏：Art Nouveau）

19世紀末にヨーロッパで花開いた新しい装飾美術の傾向を指す。有機的な自由曲線の組み合わせ、鉄やガラスといった素材が特徴。

5 利活用の提案

社会教育会館は歴史的にも意匠的にも価値の高い建物であり、外壁にスクラッチタイルが貼られた古都大津にふさわしい風格を持つ「昭和」ロマン漂う近代建築物です。

これまで、『旧大津公会堂[社会教育会館]の保存と活用を考える市民フォーラム』や『社会教育会館のあり方について話し合う会』を開催し、市民の方々と意見交換を行ってまいりました。参加いただいた市民の方からは「社会教育会館と時期を同じくして育ってきた。親しみもあり愛着もある。」「社会教育会館は様々な文化活動の場として利用されてきた。まちづくりの中心に据えてスポットをあててほしい。」といったご意見をいただいているところでもあります。

社会教育会館は多くの市民に親しまれてまいりました。学識者の方からは「古い建物があるところには潤いと歴史が感じられ、住んでみたいと思うことがある。社会教育会館の保存についても、その哲学をしっかりと持つことが必要。」とされています。

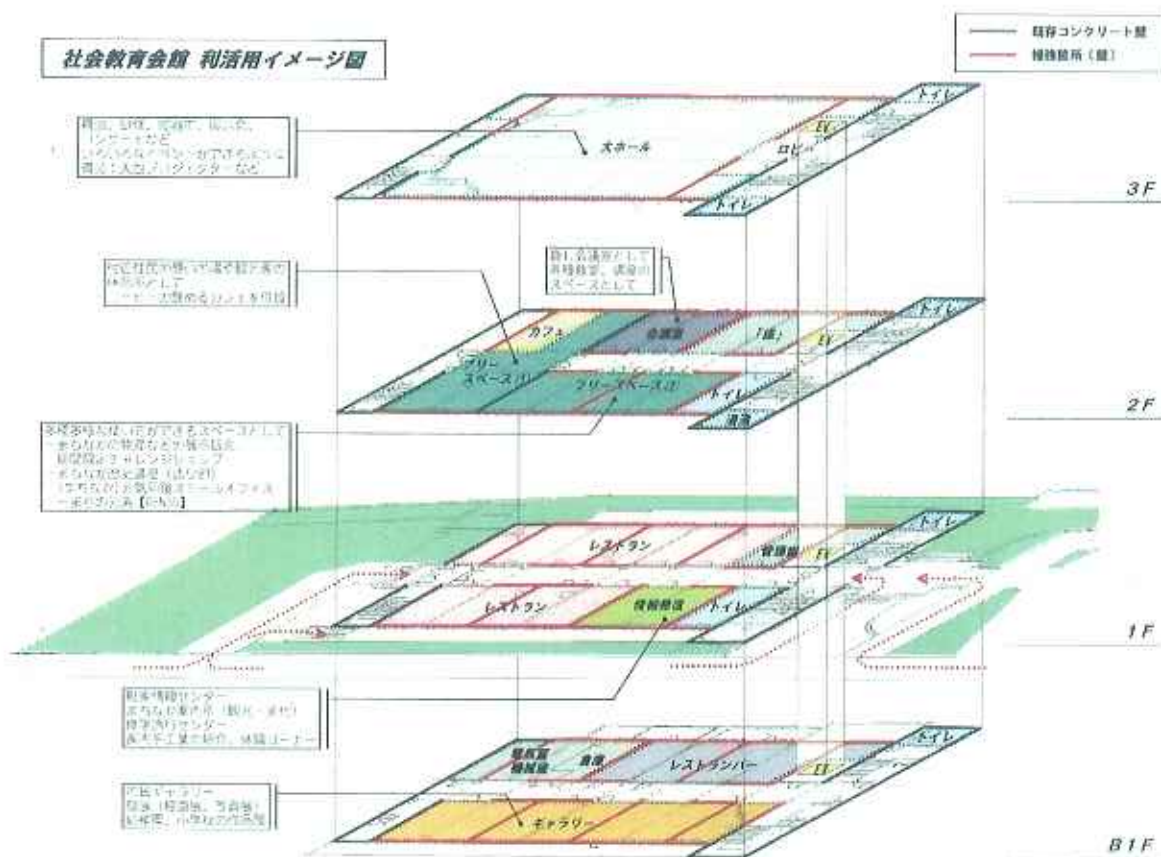
こういったことから、社会教育会館を、その外観は現状を維持し、内部のみを改装して、中心市街地の歴史資産、資源（ストック）を活用したまちづくりの推進に役立てるべきという結論に至っています。

市民の誰もが気軽に立ち寄ることのできる空間、憩いや語らいを楽しむことのできる空間を提供する中心市街地における魅力あふれる市民交流拠点施設として、また、地域文化や産業、芸術などを伝承できる観光客もが気軽に立ち寄ることのできるまちなか観光の拠点施設として利活用を図る、そして中心市街地の活性化につなげる、それが私たち大津まちなか元気回復委員会の利活用提案の骨子です。

利活用の内容といたしましては、

- ① 各種イベントなど多種多様な使い方ができるホール
- ② 付近住民の憩いの場、観光客の休憩場所を確保しながら、チャレンジショップやまちなかの物産の展示即売会、スモールオフィスも開設できるフリースペース
- ③ 町家情報センターやまちなか案内などの情報発信スペース
- ④ レストラン、レストランバー、カフェ等の民間が主体となる店舗
- ⑤ 個展、絵画展などの開催のための市民ギャラリー

を利活用の柱とし、あわせてEVの設置やトイレの改善、増設といったバリアフリー化も図っていただきたいと考えています。



6 最後に

前述いたしましたように、大津まちなか元気回復委員会では、愛すべき社会教育会館を魅力あふれる施設として再生を図り、中心市街地のまちづくりに、また活性化に寄与するため、今後の利活用について考えてまいりました。

しかしながら、耐震補強工事に要する費用に見合う効果があるのかといった費用対効果の検証、まちづくりに寄与するための施設の運営を誰が担うべきなのかといった運営主体の問題など検討すべき課題は数多くあります。また、少なくとも維持管理経費程度の費用は自らが、施設を運営する中で捻出しなければならないという思いもあります。そして何よりも市民合意の形成がこれからの一番大きな課題であることも認識しております。

こういった課題につきましては、平成19年度において、市民フォーラム等の開催を通じて市民の皆さまと意見交換を行いながら検討を重ねてまいります。

そして、社会教育会館が、市民の皆さまに末永く愛される施設として、また、市民の皆さまの思いや魂が宿る施設として保存、利活用されることによって大津のまちなかが元気になる、それが活性化につながるということを発信してまいりたいと考えています。